大学生は複数のテキストをどのように活用するのか
―作文タスクにおける情報統合に焦点を当てて―

○西 菜穂子（神田外語大学）
山方純子 （神田外語大学）
李 榮（神田外語大学）

キーワード：複数テキストの活用，産出文章の構造，情報統合

問題と目的

複数テキストの理解と活用は，大学生が学問的知識を身につけるために文献を読み解き，論文やレポートを書く際に必要とされる技能である。しかし,様々な情報源から必要な情報を適切に抽出・統合する作業には困難を覚える学生も多い。

よって，本研究では，日本国内の大学で学ぶ日本語母語話者の学生 16 名を対象とし，複数テキストの理解とその活用について調べた。参加者が共通するトピックを持つ２編のテキストを読んだ後に書いた文章の情報構造を分析し，テキストの理解度と文章の構造を分析した。

本発表では，産出した文章の情報の統合と活用のタイプが異なる３名の分析を中心に報告する。

方　　法

調査方法

約 90 分の調査を実施した。手順は，(1) 調査概要説明・同意書記入，(2) テキストの読み (複数，または，単数)，(3) 背景調査アンケート，(4) テキストが回収された後，読解をもとにした作文，(5)理解テスト,(6)馴染み度アンケートである。

テキストは２種類で，トピックは「霊長類の利他行動」である。テキスト A は論文の抜粋 (3,838 字)，テキスト B は一般向けに書かれた説明文 (2,205 字) で，抜粋以外の加筆修正は行っていない。

理解テストは各テキストにつき 10 問である。参加者は複数テキスト群 10 名，単数テキスト群 6 名で，順序はカウンターバランスされた。

分析方法

手順 (4) の読解をもとにした作文は，アイデアユニット単位で情報構造の分析を行い，Britt et al.(1999)を参考にして分類した。手順 (5) の理解テストは１問１点で合計点を算出した。

結果と考察

本研究では複数テキスト条件の協力者の中から，Britt et al. (1999) が提案した複数テキスト読解時の表象モデルのうち，ドキュメントモデル，個別表象モデルの特徴を示した２名，特徴の曖昧な学生１名の分析結果を中心に報告する。

Figure 1は，参加者 04 の産出文章の構造を分析し，図示したものである。数字はアイデアユニットの提出順，矢印は情報の繋がりを示す。参加者 04 は，文章のテーマを提示し (①)，テキスト B について論じた後 (②～⑤)，テキスト A について論じ (⑥～⑨)，全体のテーマとテキスト A についてまとめ (⑩)，最後に全ての情報を統合した (⑪)。

これは Britt et al. (1999) のモデルのうち，熟達者のもつ心的表象を表わすドキュメントモデルに相当すると解釈できる。参加者 04 は理解度テスト得点も高く，読解での深い理解を産出に活用した例と言える。

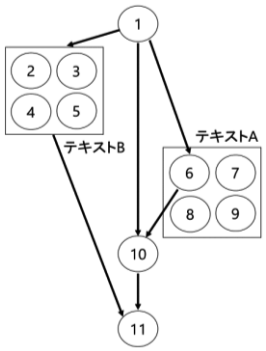

Figure 1　参加者 04 の産出文章の構造分析

また，参加者 02 は個別表象モデルの特徴を示し，両テキストの情報統合は行われなかった。そして，参加者 06 はテキストの理解が不十分で，内容が活用されておらず，複数テキスト活用の難しさが示された。

今後は，理解度，学年，背景知識との関連等の量的分析や,日本語学習者との比較も課題である。

引用文献

Britt, M. A., Perfetti, C. A., Sandak, R., & Rouet, J. F. (1999). Content integration and source separation in learning from multiple texts. In S. R. Goldman, A. C. Graesser, & P. van den Broek (Eds.), *Narrative comprehension, causality, and coherence: Essays in honor of Tom Trabasso* (pp. 209-233). Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

付　　記

本研究は，2019 年度神田外語大学研究助成を受けて行ったものである。